

# 2007 年度 学生支援GPによる講演会ブックレット



名古屋学院大学 学生サポートセンター  
(宗教部／キリスト教センター内)

目 次

温もりある社会を . . . . . 1

高齢期の生き方と地域貢献 . . . . . 9

あとがき . . . . . 16

## 温もりある社会を

講師：三森 妃佐子

日時：2007年12月14日（金） 11：10～12：40

場所：瀬戸学舎 チャペル

みなさん、漫才師である「麒麟」の田村裕さんを知っていますか。その方が「ホームレス中学生」という本を書き話題になっています。その文章の一部を読ませていただきます。「それは、僕の想像を超えた出来事だった。（中略）お父さんは僕たち3人を2階へ連れて行き、クロス状に貼られたテープの前に並べて、まるでバスガイドの名所案内のように、手のひらをテープに向けて、こう言った。『ご覧の通り、誠に残念ではございますが、家のほうには入れなくなりました。厳しいとは思いますが、これから各々頑張って生きていってください…解散!』」突然、家族解散と言われたのです。皆さんはどうでしょうか。今日、家に帰った時に「突然家族解散、これからはもう自分たち一人一人頑張って生きていきなさい」と言われたらどうでしょうか。私はこの本を読んだとき、「ホームレス」とよばれている状況、「ホームレス」でない状況は紙一重、一線、隣合わせのようだと思いました。

これから「寿町」のこと、野宿をしている人たちのことを、日常の活動の中から感じていることを少しだけお話したいと思います。今日はとても想像力を使うと思います。それはあまりにも皆さんの生活とはかけ離れていて、想像しても中々想像しきれない状況のことをお話するからです。60分間という時間ですけれども、今の日本の状況、そして私たちがどう生きていけばよいかということ、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

私は横浜の「寿町」という所から来ました。横浜と聞いて一番思い浮かべるのは何でしょうか。よくテレビなどで映像として映るのは、山下公園や外人墓地、港の見える丘公園とかあるかもしれません。また日本で二番目に高いランドマークタワーやベイブリッジ、野球が好きな方はご存知だと思いますが、横浜ベイスターズのスタジアムがあります。「寿町」はこのような観光地や繁華街に囲まれた一角にあります。この地域はあたかも繁栄の表と裏を表しているかのような町です。神奈川県に住んでいる人たちの中には、寿のことは全く知らないか、知っているとすればあそこは通っちゃいけない町、怖い町、昼間からお酒を飲んでいる人たちがいて、怠け者の町という人がいます。それは本当に寿町のことを知っているのではなく、一度も寿町に来たことのない人たちがそのように決めつけて言っているように思われます。

---

日本の中には四大寄せ場というものがあります。東京の山谷、大阪の釜ヶ崎、名古屋の笹島そして横浜の寿町です。寄せ場は日雇い労働者の人たちが仕事を探す場所で、通常は労働市場として朝早く労働力が売り買いされます。仕事を斡旋する場所として寄せ場という言葉があるのです。

1960年代にエネルギー革命として、石炭から石油へのエネルギー変換がなされました。そのために炭鉱も閉山されました。また農業政策の転換として機械化が起り、余剰人口として一家の次男三男は都市へ出てゆくことになりました。多くの失業者が仕事を求めて都会へやって来たのです。ですから急に寄せ場が出来たのではなく、日本の経済の状況の変化に並行して、このような地域が出来たのです。横浜は港がありますから、多くの人たちが港の仕事を求めてやってきました。名古屋、笹島は、1870年以降、国鉄武豊線や東海道線などの鉄道敷設工事が本格化したことにより、労働力需要が増し、多くの労働者がこの地域に集住することになりました。その笹島は名古屋市中村区名駅南2丁目にある名古屋中公共職業安定所付近に形成されている寄せ場で、労働者の間では通称「シマ」と呼ばれていました。今でも若宮大通り公園で炊き出しが行われているとお聞きしましたが、自分たちの傍にもそういう場所がある、ということを中心に留めておいて欲しいと思います。

私が住んでいる「寿町」という所は、寄せ場として日雇労働者の町としてできたわけですが、今、様相が変わってきています。それは日雇労働者の町というよりは、福祉の町となってきました。250メートル四方の中に約6,500人の人たちが住んでいますが、寿町に住んでいた人たちが高齢化してきたというだけではなく、60歳を過ぎてから他の地域からどんどん集まって来ているのです。2人に1人が高齢者といえます。この日本社会のどこにそういう地域があるのでしょうか。高齢化そしてまた障害を持っている人たちが多く、8割が生活保護を受けて生活しています。今まで生活していた日雇労働者の人たちはどこへ行ったのでしょうか。不景気で仕事がなく、仕事がないと言うことはお金がないということですから、食べることも出来ず、部屋代も払うことも出来ない人たちが路上に出ざるを得なくなり、路上生活を余儀なくされているのです。

2007年厚生労働省は、全国のホームレスの人たちの実態調査を行いました。その中で実態に則した数として、19,000人と発表しました。横浜市の場合は横浜市内で、だいたい700人の人々が野宿をしています。では、名古屋ではどうでしょうか。以前は2,000人近い人たちが野宿生活をしていましたが現在は減って約700人となり日本で5番目とされています。

このホームレスという言葉について少し考えて見たいと思います。このホームレスという言葉ですけれども、詳しくは国際的定義では「人たるに相応しい適切な住まいに住む、居住の権利を脅かされている状態を指す」

---

ということですよとされています。ですから野宿をしている人たち＝ホームレスではないのです。よくホームレスは減ったと言われています。けれども、減ったというのは緊急避難所に生活されている人たち、そしてまたカプセルホテルに生活している人たち、また簡易宿泊所で生活している人たち、建設の飯場にいる人たち、また災害にあつて復旧の仮設住宅にいる人たち、知人の家を転々としている人たち、インターネットカフェで寝ている人たちの数は含まれないのです。

また日本の失業率は、最高だった時で5%を越えました。今は4%台に下がっています。けれども、その失業率を計算する時に、そういう野宿をしている人たちの数は入っていません。それは、仕事を探すのを諦めた失業者はその対象でないということなのです。ですから、もしその人たちを入れると19,000人どころではありません。その数は10万人を超えるかも、いや100万人を超えるかもしれません。

また、野宿生活者の聞き取りが行われた時に、8割の人たちは仕事をしたいということを言っています。どんなに今仕事が増えているとはいえ、中々仕事を得る事は困難です。その一つの理由に仕事に就くとき履歴書が必要です。その住所を書く欄に、\*\*地下道とか、\*\*公園とか記入するわけにはいきません。日雇労働者そして日雇派遣といわれている人たちもそうですが、職歴を書く欄にすべてを書くことが出来ません。「ああ、あなたは随分仕事を変わっているね。」と仕事の数が多い分だけ信頼はありません。年齢の制限をしてはいけないといわれていても、雇用者はやはり若い方を雇ってしまう傾向にあります。乗り越えなければならない壁がたくさんあるのです。最近、日雇派遣の募集要項では履歴書が不要というところもあります。それは履歴書がないということは逆に、もう要らないと簡単に言われるような、使い捨て労働にされているということです。このように、深刻な問題が次から次へとあります。

また、野宿している人たちは常に不安に苛まれているのです。

それは「襲撃」です。忘れられない事件に、1983年の「横浜事件」と呼ばれているものがあります。それはその年の2月に山下公園で野宿をしていたSさん、当時61歳の方が、10人あまりの中高生の子どもたちに殺された事件です。Sさんは元々青森県の出身で菓子職人でした。けれども過労が元で妻を失い東京に出てきました。やがて横浜の寄せ場、寿町に来て日雇労働の仕事をしていました。けれども56歳の時に体調を崩し、日雇労働の仕事も出来なくなり、寿町の近くにある山下公園で野宿生活をしていました。Sさんを日ごろ公園で見っていた子どもたちは、「あいつは大型ごみだ。反社会的な存在だ」と言って公園のごみ箱に入れ、殴る蹴るの暴行の末に殺してしまったのです。子どもたちは逮捕されたときに何と言ったと思いますか。「なぜ逮捕されるのかが分からない。ごみを処分した。面白

いからやった。」と、人を殺したという認識が全くなかったといひます。この事件だけでなく、この類の事件は現在でも続いています。その中でも紹介したい事件があります。去年兵庫県姫路市の国道2号夢前橋で野宿生活をしていた、無職の60歳のAさんのことです。足が不自由で野宿をしていたところに少年たちがやってきて、大きな特大のビール瓶にガソリンを入れて作った火炎瓶を投げ、そして死なせたという事件です。その犯人は15歳から18歳の少年たちで、そのリーダ格の少年は、3月の卒業式で答辞を読んだというのです。その答辞の中身は「人としての思いやりを見失わず、凛とした姿で生きていくことが必要だと思います。」と述べたというのです。学校では教師の頼みごとや教えにも耳を傾けるなど、目上への人には素直だったということです。けれどもその反面、面白くなってどんどんいじめたということが供述として述べられていたということを知き、非常にショックでした。また、皆さんもまだ忘れていないと思いますが、去年愛知県岡崎市で、野宿をしている人たちの連続殺傷事件があったことを覚えているかと思ひます。それは11月20日の岡崎市板屋町の乙川河川敷で、住所不定の無職69歳のHさんの遺体が見つかったということでした。死因は失血死で頭や顔上半身を鈍器で激しく殴られたということです。この方だけでなく、連続で襲撃に遭いそしてまた亡くなった方もおられたそうです。みなさんにとっても身近なところでこのような事件があったと言うことは、非常に衝撃だったと思ひます。その69歳の方が、野宿をせざるをえなかったということも衝撃でした。そればかりか、その方が一生懸命貯めたお金を泥棒したのです。このような残酷な事件はいつまでも後を絶ちません。そして、生徒が答辞で述べていた事との大きなギャップ。命の大切さがこんなにも声高に唄われながら、どうしてそれが出来ないのかという疑問です。皆さんも一緒に考えてほしいと思ひます。命の大切さ、命の重さ。私はいつも思ひます、なぜ野宿をしている人たちが、このような目に遭わなければならないのか、ということを知き。それは野宿をしている人たちのことを怠けもの、自業自得だ、勉強しないからあんなのだという、常に差別や偏見の眼差しがあるのではと思ひます。それは日常生活の中で野宿していた人たち、そして日雇労働をしていた人たちがどのような働きをしているのか、生き方をしてるのかということが分からないからではないかと思ひます。私たちの生活全般見まわしても、何一つその人たちの働きによらないものはないと思ひます。横浜は「国際都市横浜」という看板を掲げ、一生懸命に町の外観をきれいにするを考えています。私たち人間は、外観の評価はしますが、その中で働く、3K労働と言われる「きつい」「汚い」「危険」な労働をしている日雇労働者の人たちのことには思いがいかないのです。その日雇労働者や、野宿労働者の人たちの汗と力によらなければ、私たちの生活は成り立たないのです。

---

ごみ扱いされている労働者たちは、「私も人間だ。自分たちを人間扱いして欲しい。」と日々叫んでいます。その叫びにわたしたちはどのように答えればいいのでしょうか。

近年、「勝ち組、負け組」という言葉が頻繁に聞かれるようになりましたが、人間をランク付けするという価値観が常に横行しています。皆さんも幼稚園の時から受験があったのではないのでしょうか。幼い時から競争にかき立てられたわけですが、あたかもその人の人生がそこで決まったかのように見えるという価値観が多く存在しています。そして振り返って「こんなはずじゃなかった」と思うことがしばしばあるかもしれません。野宿している人たち、寿に住んでいる人たちは、まさか自分が「ホームレス」になって野宿するとは思わなかった、という人たちが多くいます。まさかということが常に起りうるのです。今起こるかもしれません。皆さんだけでなく私自身であるかもしれません。どんなに努力しても、その努力と関係なく起こることがあります。どんなに頑張っても、頑張っても、どうすることも出来ないことも起こるのです。

寿町に住んでいた86歳の高齢者の方の場合は、簡易宿泊所の管理人さんから病気だということで相談を受け、部屋に行きました。もう歩けなくなっていました。話を聞いたら火事に遭って行き場所がなくなり、全部を失い、寿町しかなかったというのです。天災や火事、地震もそうです。常に何が起こるか分からないということです。

また70歳の方ですが、ある有名な大学を出て、外資系の貿易の仕事に長年勤めていました。けれども突然お母さんが倒れ看病をしなければならなくなり、仕事を辞めざるを得なくなりました。看病し続けたお母さんが亡くなり、気がつけば家を退かざるをえなくなっていたというのです。

また30歳の青年の話を紹介したいと思います。この方はお父さんが団塊の世代ということで、ファミレスで働いたり、派遣会社に登録して仕事を得ていました。けれどもある日、お父さんに「来年は定年を迎える。おまえもそろそろちゃんとした仕事を見つけろよ。」また「退職したらこの家を出て行ってもらう」と言われたというのです。フリーターという言葉は、皆さんの身近にも考えられることかもしれません。自分の好きな仕事が見つかるまでは、フリーターで生活していくという人も多くいるかもしれません。今紹介したように、親が面倒見てもらえるうちはいいでしょう。けれどもお父さんが定年を迎え、「もう面倒見られないから出て行ってくれ」と言われたらどうでしょうか。また親御さんが年老いて、急に亡くなった時どうでしょうか。皆さんはどうでしょうか。自分には関係ないと思うかもしれませんが。しかし先ほども言ったように常に隣り合わせにあるのです。このように言う不安だけを皆さんに与えるようですが、一緒に考えていきたいのです。

---

今、「ネットカフェ難民」と呼ばれる人たちのことがテレビ等で話題になっています。「ホームレス予備軍」と言われている人たちです。54,000人の人たちが、ネットカフェやファミレスで生活しているということです。皆さんと同じ世代や、中高齢の人たちに多いといわれています。

さて、ここで椅子取りゲームのことをお話したいと思います。先日、北九州で活動している牧師さんであり、野宿者の支援活動をしている奥田さんという方をお迎えしてお話を聞きました。その中でこのゲームの話がされました。10脚の椅子があり11人の人で椅子取りゲームをしました。もちろん一人が座れません。そこでその一人に対して罵倒してこういうことを言うのです。「おまえ努力が足らんやろ。怠けてたんやないか。自己責任や。頑張ったら座れたやないか。悔しいか。悔しかったらもう一回やれ！」これはゲームの中ですから本当にそういうわけではありませんが、非常に今の日本社会の状況を表していると思います。そしてまた2回目やると、今度は違う人が残りました。その人に向かって罵倒が始まります。何度やってもその10脚の椅子に11人は座れません。社会の状況に置き換えてみるとこの10脚の椅子が仕事で、そして求職者が11人となります。どうしても座れない人が出るのです。そういうときにどうして座れないのか、何が原因かということを考えて欲しいのです。皆さんはやっぱりその残った一人に対して、努力が足りないからだ、自分の責任だ、怠け者だと思いませんか。私は寿町、そして野宿をしている人たちと関わっていて、どうしてもそのようには思えないのです。景気がいい時、野宿をしている人たちはいませんでした。景気が悪くなりバブルが崩壊した後、野宿をしている人たちがこんなに増えました。仕事がないからです。どうやったら11人の人が皆椅子に座れるようになるのかを考えて欲しいのです。椅子を増やすという方法が、一つに考えられるかもしれません。しかし今の日本の多くの企業はどんどん仕事を減らし、倒産していく会社も少なくありません。そういうときに皆で考えるべきことは、「一人も見殺しにするな、見捨てるな。」そして、「皆抱っこし合ってでもその10脚の椅子に座ろうよ」ということです。分かち合おうという生き方こそが、今の私たちに求められていることだと思います。

皆さんは、「生活保護法」という法律を聞いたことがあるでしょうか。日本国憲法の中には「生活保護法」といって「国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」という規定があります。この法律は「国が生活の困窮の程度に応じ、必要な保護を行い、最低限度の生活を保障し、自立を助長する。」ということを目的につくられた法律です。でもなぜこの法律がありながら、野宿をしている人たちは、最後のとりでさえも絶たれてしまうのでしょうか。それは居所がないということだけで、最後の砦からも突き落とされ、飢えと命の危機にさらされた日々を強いられ



---

ているのです。

厚生労働省は、来年度の予算編成に向けて生活保護費のうち、食費や光熱費水費に充てる生活扶助の基準を引き下げる方向で検討しているということを発表しました。保護を受けていない低所得者層が、保護世帯より生活費が下回っていることにより、勤労意欲の減退に繋がらないよう是正が必要ということが新聞に書かれてありました。けれども生活保護といっても微々たるものです。皆、少ないお金の中から一生懸命節約して生活しているのです。しかし物価はどんどん上がっています。そしてガソリンの高騰が毎日のように報道されていますが、生活は年々厳しくなっていく一方です。そういう中で、生活保護も引き下げられるということがどういうことを意味しているか。本当に生き辛い社会だなと思います。

今日のタイトルは「温もりある社会を」とつけさせていただきました。この言葉は、私は非常に好きな言葉です。神奈川人権センターというところがあって、野宿者の方々のことを扱ったビデオを作りました。その題名が「温もりある社会を」という言葉です。この言葉の中に私は「神の国」ということを思うのです。皆さんもキリスト教主義の学校に入り、聖書を学び、読み、色々考えていることがあると思います。私はこの「温もりのある社会」ということの中身は、「平和」だと思うのです。平和な神の国が、この温もりある社会だと思うのです。聖書の中に「平和を実現する人たちは、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」と書かれてあります。平和はどこにあるとかないかではなくて、皆で実現していくものかということをお教えているのだと思います。平和とは命ある者一人一人が、人間として生きられることだと思います。問題を避けて通ることではなくて、積極的にそれに取り組み平和を実現してゆく、その平和への道がどんなに大変で苦闘の道であっても、それを創り出していくことが私たちに課せられていることだと思います。

野宿している人たち一人一人も命ある人間です。神が与えたもう、かけがえのない人間なのです。生まれつきに野宿をしている人たちはいません。そしてまた神の前においては、一人一人がかけがえのない命ある存在だと思います。好き好んで産まれたのではないと、もしこの中で思っている人がいたら、あなたがた一人一人が、神様にとっては必要なかけがえのない命であるということをお、ここで覚えてほしいのです。それは、何かが出来る、出来ないとかいう能力によるものではないと思います。肌の色、宗教、国籍、性別によって差別があってはいけないことだと思います。ある人は「違いが大きければ大きいほど良い」という言葉を残しました。出来れば同じような考えを持った人たちや、仲間だけで生きてゆきたいと思うかもしれません。けれども違いが大きければ大きいほど豊かになり、その違いを尊重し合い、認め合うことで世界中の一人一人が手をつなぎあ

---

って、生きていけると思うのです。命の大切さが叫ばれています。

ここで一つの映画を紹介して終わりたいと思います。ご覧になったかたもおられると思いますが「ペイ・フォワード」(可能の王国)という映画です。ペイ・フォワードというのは英語にはないことばで造語だそうです。「ペイ・フォワード」これは主人公の少年が中学一年生になった最初の日に社会科の授業で先生が「自分の手で世界を変える。それが君たちの課題だ」と言います。すると少年は、「そんなことできるはずがない」と言うのです。母親は生活に疲れ、父親は自分を捨て、自分はイジメを見て見ぬふりをしてしまう。「世界を変えるだって。このクソツタレの世界を？一体どうやって？」けれどもこの少年はこの課題に誰よりも真剣に取り組みました。それはこの少年が誰よりも強く世界を変えたいと願っていたからです。この少年には自分の生活を照らしてくれる希望が必要だったと言うのです。そしてこの少年は一生懸命考えました。そしてひとつの方法を見つけました。それが「ペイ・フォワード」です。それは相手から受けた好意をその相手に返すのではなく、身の回りにいる別の人へ贈ることでした。

それを観て私は、この先生が語った言葉は神が私たちに教えているのではないかと思いました。私たちに「自分の手で世界を変える、それが私たちの課題だ」と言っているのではないかと。「自分の手で世界を変える」それが神から与えられている私たちの課題であり試練だと思います。そして神から与えられた大きな愛を、宝物を、賜物を他者に返して行く、分かち合っていく。このことこそ最も神が求めていることだと思います。神が与えたこの世界、神が創りたもうたこの世界で平和を作り出していくこと、互いに愛し合うことが実現されるのではないのでしょうか。

2007年を振り返ってみて皆さんいかがでしたか。嬉しかったこと悲しかったこと、いろいろあったかもしれません。名古屋学院大学に入ってよかったなあと思う人、こんなはずじゃなかった、もっと別の道があるんじゃないか、と悩んでいる人もいるかもしれません。どんな時にも支え合う関係を作り出していきたいと思うのです。命一つ一つが繋がりにあるからこそ温もりある社会となります。野宿している人たち一人一人がきちんと生きられる社会を築いていきたいと思います。最後に宮沢賢治の「銀河鉄道」という本の中の一節を読みたいと思います。

「世界全体が幸福にならない内は、個人の幸福はありえない。」

.....

## 講師プロフィール

1955年生まれ。農村伝道神学校卒。日本キリスト教団補教師。  
日本キリスト教団神奈川教区寿地区センター主事。大学非常勤講師。

### 高齢期の生き方と地域貢献

講師：田口 誠弘

日時：2007年11月27日（火） 15：00～16：30

場所：白鳥学舎 101教室

学生の皆さんの前で話するのはとても嬉しいです。私ももう一度そちら側に座って、学んでみたいですね。皆さんを見てとても羨ましく思います。

私は69歳になります。50歳ぐらい皆さんより年上かもしれませんね。実は、私はこちらでお話しさせていただくことが決まってから、学校の資料を送っていただき拝見いたしました。そうしたら、名古屋学院大学の建学の精神で私は自分の生き方を選択しているということが分かったのです。“心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛しなさい。そして、隣人を自分のように愛しなさい”人間のおごりを戒め、人との調和を説いたこの言葉は、神から与えられた自己の能力を最大限に伸ばし、社会のため人のために惜しみなく用いるべきであるというイエス・キリストの教えを示しています。私が今69歳になってどういう生き方をしようかというときに、この建学の精神の言葉が、私にとって素晴らしい指針になっているということを初めに申し上げたいと思います。

今日私が話する「高齢者の生き方」なんて皆さんには、50年前の異物が出てきたように思われるかもしれません。ところが、「高齢期の生き方」というのは、赤ん坊の時からずっと続いているんです。母親に教えられたり、学校の先生などから教わった価値観は続いてゆき、社会人になって定年退職し、自分の人生の終わりがだいたい見えてくる頃まで、連綿としてつながっていくんです。今現在の皆さんの価値観とか生き方というのは、皆さんが私の年齢になってもやはり続いています。急に変わったりしないものです。

分かりやすく言いますと、皆さんこれから結婚する人も多くいることでしょう。私には小さい頃好きな女性のタイプがありました。小学校に上がる前に、好きな女の子のイメージがもう出来ていたんです。そして小学校、中学校、高校、大学と進み社会に出てもその自分の好きな女の人のタイプというのは、ずっと変わりませんでした。なぜそういうイメージが出来上がったのかよく分かりません。

そのイメージを持ってから、いろんな人を好きになりました。でもほとんどが片思いでした。

やがて会社に就職して間もなく、私が勝手に好きになった11人目の女

---

性がありました。鳥取の高校を卒業して看護婦の見習いをしていた女性でした。その人が、たまたま私の勤めていた地域に開業医の見習いとしてやってきました。その彼女を初めて見たときに、今まで片思いをしてきたのに、その11人目に会った女性つまり今の女房を見たときに「あっ！私はこの女性と結婚する！」と強く思いました。

小さい頃の価値観というのは連綿と続いていくと思います。幼少時に抱く価値観というのは、ずっと死ぬまで続くものなんです。今の皆さんの生き方や価値観というのは、私の年代になっても現れてきます。死ぬ瞬間まで、それは続いていきます。そのことを是非皆さんにお伝えしたいと思います。

同時に、死に方と生き方というのは連動しています。一生懸命生きていけば、死ぬときほとんど怖くないのです。私は神から与えられた自分の能力を最大限に伸ばして、社会のため人のために惜しみなく用いるべきであるという、この大学の建学の精神に書いてあることとたまたま同じことを実行しようと、一生懸命生きてまいりました。

その働きの一つが、地域貢献なんです。

さて、地域貢献をはじめの前に次のようなことも考えておく必要があると思います。地域貢献をするに際して、先ず自分の家族に対する愛、それから隣近所に住んでいる人に対する愛、郷土愛、愛国心、そして地球を大切に思う愛が必要であります。こういう風に次第に広がっていくのが自然だと思えます。家族はどうなってもいい、世界の平和が大事だというのは、ちょっとやはり飛びすぎだと思えます。

地域貢献というのは自分が生かされていることをまず感謝する。そしてそこから地域に住んでいる人たちに対して、何か役に立ちたいという愛の表現を行動にしていくことだと思うんです。

今の時代は特に地域にたくさん問題があって、その問題解決にシニアの貢献が期待されています。高齢者にとっても自分の地域で何らかの貢献が出来るということは、これがとても生きる張り合いになります。そういった高齢者の地域貢献が今、世の中で期待されています。例えば団塊の世代が、これから60歳、63歳くらいになるとだいたい地域に戻ってきます。そういう人たちが地域に戻ってきたら、会社でやっていた色々な才能や経験を生かして、地域の問題を解決することに役立ってくれたら、という風に考えられます。そしてそれを生かし、実行に移す。それを私は考えています。

さて、具体的に地域活動をやる時、次のような順序で行うようにしています。

まず地域のニーズ、地域の問題が何かということを考えます。

今は少子高齢化なので、沢山の問題が生じています。それに対して自

---

分が何をするかという、明確な理念を持つことにします。私の場合は、高齢者の生き方を充実させたいという明確な理念、目的を持って行動しています。まずは「一緒にやる人、関心のある人、手を挙げて！」と、呼びかけます。そして人が集まったら、どうやったらその人達の協力が得られるかを考えます。すると、リーダーシップが必要になってきます。どんな組織を動かすにもリーダーシップが必要です。

社会貢献におけるリーダーシップのあり方として、後でも述べますが、無理やり人を動かすという発想ではなく、仕えることによって、他の人が協力したい気になるという「サーバントリーダーシップ」の考え方を持つ必要があります。

さて、「サーバントリーダーシップ」のことをふまえながら、具体的にやっている私の地域貢献の活動に「熟年生き生き会」というのがあります。H16年の1月から活動していますので、大体4年近くになりました。高齢者おおむね60代以降が現在住んでいる地域で、熟年期を生き生きと過ごすために必要なあらゆる情報、あるいはサービスを提供しているのです。目指すところは、「人に世話にならないで、自立して過ごす」ということが挙げられます。自分のことは自分で出来るようにならなければなりません。2つ目は、才能や経験を地域で生かす。3つ目に、不安でなく期待を持って老いを受け入れて生きる。年を取ったらどういう年寄りになろう？という、明るい希望を持って年齢を重ねていくという考え方、こういうことをモットーにして活動しています。あまり立派なことをいうのではなく、身の丈にあった無理のない自分らしい生き方を目標にしています。

こんなことを目指しながら、この熟年生き生き会の活動を進めています。

具体的にどんなことをやっているかと申しますと、初めに熟年生き生き会を通して、生き生きと生活している熟年者の「生き方モデル」を紹介しています。どこからか偉い先生方を呼んできて話を聞くというのではなく、自分の地域の仲間の中で、とても生き生きと自分らしく高齢期を生きている人の話を聞くのです。その方の生き方の体験談を聞き、聴講者に自分の生き方について改めて考えていただく、というやりかたなんです。自分たちの地域の身近なところで、生き生きと生きている方を講師にお迎えするのです。

それから2番目に行政と連携して高齢者支援の講演会を開催しています。そして3番目に、毎月無料で会員の相談にのったり、問題の解決を支援しています。そして4番目に高齢者専用の電話帳を作っています。また5番目に昔流行った唱歌とか、流行歌とかを一緒に歌って楽しんでいます。6番目に、家族や大切な人に残す遺言ノートの書き方をテーマとして毎年セミナーをやっています。歳をとって自分の体と頭が動かなくなった

---

ら、こういう風に介護してもらえばいいとか、病院に入ったら延命治療しないで欲しいとか、財産の相続についてはこんな考え方をしているとか、お葬式やお墓の指示とか、亡くなった後の連絡先などをノートに残しておく。そうしておくことで死後、子どもたちがとっても助かります。それから7番目に、「伴侶に先立たれた方が語り合う会」というのをやっています。夫婦のうちどちらかが必ず先立ちます。そんなときに悩みや心配事が重なり、鬱になったりした場合にそういう方をサポートしています。8番目に市民活動団体とコラボレート（連携）して色々な活動をやっています。9番目は、毎年高齢者のための、よろず相談員養成講座を開催しています。10番目として、毎月高齢者のためのよろず相談室を設置して、相談に応じています。例えば、有料老人ホームを選ぶときの情報提供や、応援なんかもしております。

「高齢者のためのよろず相談員養成講座」もこれから始める事業であります。これを小平市の市民活動支援交互補助事業というところに申請をしました。そうしたら補助金を出してくれるということになりました。非常に有用であって、補助金を出さずに相応しいという判断をいただいたのです。そのお金は主に、講師の方の謝礼に使わせていただいています。講座の内容は、「高齢者のためのよろず相談員の役割は何か？」あるいは「サクセスフルエイジング」（高齢者として充実した歳のとり方）などです。それから、「ボランティア活動と社会貢献」、「高齢期の心と体の健康」、「人間関係とトラブルの対処法」、「相談の受け方話の聞き方」、「お家の備えと相続対策」、「定年貢献制度について」、「定年退職後のライフプラン」、「これからのシニアの就業対策」、「介護と対策」、「高齢者の防犯防災対策」。これらのことが講演の内容になっています。そしてさらに地域で、高齢者の相談にのる人たちのチームを作ろうと思っています。これが今私の進めている地域貢献の事業であります。

ここで皆さんへ贈りたい言葉を資料の中に記載しておきました。「昨日は夢にすぎず、明日は予感でしかない。精一杯に生きた今日は、全ての昨日を幸せな思い出に変え、全ての明日を希望に満ちたものに変えていく。」（カーリー・ダーサ/詩人）。今日を精一杯生きていなさいということなのです。それから次に「一人一人が向上しなければ、世界は発展しない。だからこそ私たちは、自らの向上に努めなければならない。同時に最大限、人の力になることです。そうすれば、人類共通の責任を果たすことが出来る。」（マリー・キュリー/科学者）その次が「もうこの辺でいいやと思ったら、その時は敗北している。」プロ野球元監督の広岡さんの言葉です。また「我々は言葉だけでなく、行為でそのことを示さなくてはならない。」これは有名なJ.F.ケネディ大統領が、演説の中で語った言葉です。

これらは私の好きな言葉ですが、皆さんも自分の好きな言葉をノート

---

に書き留めて、繰り返して読んでみるといいと思います。最後に、私が地域活動をやる上で大切にしている「人の協力を得る方法、」これを皆さんにお話しておきますので、参考しにしていただけたらと思います。

私もかつてはサラリーマンでした。その当時は上司がいて、仕事の上のほうから「何日までにこれだけやれ」と必ず指示がきました。給料を貰っていますので、自分の上司が好きでも嫌いでも関係ありませんでした。こういう状態の中で、ずっと40年近く働いてきました。今度は地域社会に入りました。その双方の大きな違いは何だと思いますか？ 実は、リーダーシップにおいての最大の違いがあるんです。会社というのは給料を払っている関係があって、上下の関係になっています。地域社会は、ボランティア団体、NPOそういう団体に代表がいたり副代表がいたりするわけですが、その関係は上下の関係というよりも、むしろ皆横一線みたいなもので、同じ志、同じ目的に向かって、力を合わせて動いている団体なのです。縦になっているか、横になっているかの違いですね。会社にいるときは、上司には課長や部長などの肩書きがついていて、上からの命令に、基本的には部下は従わなければなりません。私が現在行なっている地域活動では、そういう風にならなければならぬ。誰もいなくなってしまう。サラリーマン時代もそのような関係で生きてきて、また地域社会でもやるのかといった感じになるのです。でも地域貢献では、そうではなく、高齢者を支援する社会的な意味を感じて、一緒にやりましょうという人達が集まっているわけです。そういう人の協力を得るためには、命令とか権力では出来ません。例えば私の団体でも、個人的に私の考えに対して好感を持っている。そういう人が集まっています。縦ではない関係で人を動かすというのは、とても難しいのです。

私が、会を立ち上げるときの大きなポイントが2つあります。1つはこの会は何を目的にやっていくのか、という目的をしっかりと打ち立てます。これを代表である私が、しっかりと言わなければならないという点です。つまり協力者に対して、きちっと目的を説明するというのが大事です。その次が、何を何のためにやるかということきちっと皆が納得したら、具体的にいつやるかという部分については、一緒に働いている人の考え方を徹底的に受け入れていきます。そして、私の組織には8人ぐらい一緒にやってくださる方がいますけれども、その人たちが持っている個々の得意技、能力を私たちの会で発揮しやすいように、先に立っている私が仕事の分配とか調整をして、よりよい環境を作るように考えます。そして、一人一人が力を出し切っていい仕事をしてくれた時に、その人たちの能力の発揮、成果に対してきちんと感謝をいたします。それによって、たくさんの方が動いてきます。また先に立つ人は、責任とか経済的な問題が降りかかってきます。でもそういうことから逃げないできちっと押さえていく

---

と、皆ついて来てくれます。つまり先頭に立つ者が、協力者の利益を一番に考えて根回しをしたり、前準備をしたり、いい結果に対して評価を与えたりするのです。人からあまり見えないところで仕事を積み重ねていくとついてきてくれると思います。

サーバントリーダーシップという言葉があります。それは、リーダーの仕事はサービス業であるということです。部下の成功にのみ配慮して環境作りをするというリーダーシップ理論です。地域で、一つの団体を成功させて貢献につなげていこうとすると、リーダーはこのサーバントリーダーシップを、しっかりと身につけていないとうまくいきません。特にうまくいかないパターンは、リーダーが威張ることです。これだと、ほとんど周りは逃げていってしまいます。繰り返しになりますが、地域の活動を成功させていくには二つのことが挙げられます。一つは、旗を立てて目的をはっきりと打ち出し、理念をしっかりと持った人、自分の人生に対して明確な夢や目標を持った、そのようなリーダーが必要です。次にその夢や目標に向けて旗が掲がったら、多くの人の共感を集めることが必要になります。

こんなことをしながら、私の地域貢献が進んでまいりました。まだまだ、中々上手くいかないこともありますけれども、その都度皆が知恵を絞って前に進んでゆく。最終的には私の後継者を育てて、バトンタッチしてゆく。こんな風に考えて進めています。さっきお話ししました、サーバントリーダーシップを身につければ、企業人として成功もしますし、同時に地域で成功する特性を得られると思います。例えばサラリーマンの時代でも「俺が俺が」といって他者を強引に言うこときかせようとしても、それは無駄です。地域でもそのように支配しようとする、全くうまくいきません。むしろ、周りの人が成功するように、いつも支えるという姿勢がうまくいきます。これがやはり人を動かす力です。

例えば個人で自宅に小さなオフィスを作って、独立して自営の道を歩く時でも、そういったサーバントリーダーシップつまり周りの人の協力を得られる力がありますと、定年後でも安定収入を得て、立派にやっていける道が拓けるのです。組織に所属している間は、その組織の看板で働くことが出来ますけれども、やがて定年になるとそう出来なくなります。そういうときにこの協力を得る力、サーバントリーダーシップが生きてきます。そのことを皆さんは、大学在学中に身につけていけば、これからの人生が非常にいい方向に進むということが言えます。本学の方針の中に「心を育てることから始める」というのがあります。皆さんがこの精神を理解できれば、将来にとって大きなプラスになるという風に考えられます。最後にまた、私の好きな言葉をいくつか書いておきました。「美しい瞳であるためには、他人の美点を探しなさい。」素晴らしい言葉ですね。オードリー・ヘップバーンの言葉です。作家、中谷彰宏が言った「それをするのに最高



---

の日は今日、最悪の日は明日である。」これも私の好きな言葉です。「0と1の間は、1と99の間よりも広い」と言った人がいます。つまり最初の一步が次の一步を生み、その積み重ねのみが夢を実現させる。これはやはり実際にやり遂げた人の言葉ですね。0と1の間が一番大きい、つまり最初の一転がりが一番難しいが、転がりだすと車輪が回り出します。車でも、最初の一回を転がすときに大きなエネルギーが必要になります。「夢を追いかけても君は成功しないかもしれないけれど、成長はするだろう。成功は約束されていないけれども、成長は約束されている（松崎俊道/コンサルタント）。夢を追いかけている人を馬鹿にしてはいけません。夢がなくぼーっと生きている人は、いつまでたっても、何にも出てこない。そういう人に限って、人のことを批判する傾向があります。「勝手に自分の限界を作るな、自分の可能性を信じなさい」と言いたい。オリンピックは決して能力が高い人の集まりじゃありません。オリンピックに行きたいと、強く思った人の集まりです。」（井村雅代/元シンクロ日本代表コーチ）。私は、これと同じことを有森さんが言うのを聞きました。素晴らしい言葉だと思います。皆さんもどうか、大きな可能性に向かって歩いていって下さい。この大学の建学の精神は、素晴らしいと思います。私も、これと同じものを自分の人生の指針にしています。どうぞ皆さんも建学の精神に学びつつ、素晴らしい学生生活を過ごしていただきたいと思います。ありがとうございました。

---

#### 講師プロフィール

1938年秋田県生まれ。1961年中央大学法学部卒業。大手食品会社教育部長歴任。定年と同時にコンサルタントとして独立。経営・能力開発研究会代表。熟年生き生き会代表。栄養療法による健康アドバイザー。中小企業診断士。55歳で受洗。著書に『40代から生き方上手になる本』（日本地域社会研究所刊）ほかがある。



## あ と が き

学生支援GP（2007年度 文部科学省 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム）の一環といたしまして、学生サポートセンター（キリスト教センター内）では様々な事業を展開してまいりました。そのなかでキリスト教主義大学としてのスピリチュアルケアの観点から実施しました二回の講演会内容を、冊子にまとめました。

これを通して、講演会に出席することができなかった学生の皆さんも、今を生きる上で大切なヒントを何か感じていただければと思います。



2007年度 学生支援GPによる講演会ブックレット

---

2008年3月31日発行

編集・発行 名古屋学院大学 学生サポートセンター

〒456-8612

名古屋市熱田区熱田西町1番25号

TEL 052-678-4096

印刷 株式会社 鈴活印刷

---

